奈良新聞　（第3種郵便物認可）

文化

岸田日出男の遺したもの

次代に伝える記憶遺産

なら民俗通信 276

松田　度

松田　度

■一本の電話から

二〇一六（平成二十八）年の歳末、職場に一本の電話がかかってきた。声の主は、大淀町北六田（むだ）在住の岸田高志（たかし）さん。「曽祖父の遺した資料が家にあるので見てほしい」とのこと。「そうですか、では近日中にうかがいます」と、なにげなく返事をした。

彼の曽祖父は戦前に奈良県の林業技師を務め、吉野熊野国立公園の指定に尽力した岸田日出男（ひでお・一八九〇〈明治二十三〉～一九五九〈昭和三十四〉年）。吉野熊野国立公園は、一九三六（昭和十一）年二月の指定以来、八十一年の歳月を経ている。当時のことを知る人は少ない。

ここ数年、奥吉野の山村でガイドなどを続けている私も、岸田日出男といえば大淀町ゆかりの偉人。山岳関係の著作がいくつかあって、「吉野熊野国立公園の父」、というくらいの知識しかなかった。

同年十二月二十八日、岸田家にお邪魔して、目に飛び込んできたのが大量のダンボール箱。数えると六十箱以上。心の中で「どうしよう」と思ったが、もう後にはひけない。二日間かけて、ほこりにまみれながら、中身を確認してメモを取り、スナップ写真を撮った。

この作業中、私はわが目を疑った。国立公園の仕事にとどまらない、日出男の勤勉さと博学さ、先見性。そして、散逸せずに保存されていた、その資料群の重要性に気づいたからである。

岸田日出男の資料（以下、日出男資料）は、現在整理が済んだ分で、おおよそ三千二百件のリストが出来上がっている。その内容を分類すると、刊行物類（雑誌や書籍・地図など）、史資料類（フィルム・写真・古文書・公文書・標本など）、記録類（書簡・原稿・ノートなどの自筆物・スケッチなど）となる。

その年代は、江戸時代にさかのぼる古文書をのぞくと、学生時代のノートから（一九〇五〈明治三十八〉年）から、彼が亡くなる直前の自筆原稿（一九五九〈昭和三十四〉年）までの、約五十四年間に収まる。

興味をそそられたのは、戦前に吉野郡の各地を歩いて集めた、地元民の聞き書き記録と写真だった。眺めていると、今は失われてしまった山村生活者の生の声が、ぼそぼそと聞こえてきそうだ。

資料の中には、「ニホンオオカミ」とみられる動物の上顎（じょうがく）骨もあった。これについては、日出男が一九三六（昭和十一）年に上北山村で採集した経緯を述懐している（「日本狼物語　上北山村小字天ヶ瀬で聞いた話」『吉野風土記』第二十一集、一九六四〈同三十九〉年）。ニホンオオカミは日出男が学生だった頃の一九〇五年、東吉野村鷲家（わしか）で確認されたのを最後に絶滅したとされる。彼が採集した上顎骨は、絶滅前のニホンオオカミを物語る貴重な手掛かりとなる。

■戦前の映画フィルム

さらに驚いたのは、古びた缶ケースに入っていた計三作品の映画フィルムである。専門業者にお願いして再生したところ、最初に映ったのは、大峯奥駈道（おおみねおくがけみち）や大台ヶ原といった、奥吉野の山岳地帯の風景だった。後の調査で、これは戦前に撮影された記録映像（一九二三〈大正十二〉年八月）と判明した。吉野を撮影した現存最古の映像作品『吉野群峯』である。

別のフィルムには、幽邃（ゆうすいな瀞峡（どろきょう）の風景と、丸太を組んだいかだ流しの姿があらわれた。これも戦前に撮影されたもの（一九二三〈同十二〉年八月頃）で、約百年前のいかだ流しをとらえた貴重な映像「瀞八丁実写」と判明した。

残る一つの映画フィルムは、一九三七〈昭和十二〉年に制作された『熊野路』。再生すると、音楽とナレーションが流れてきた。当時流行した「串本節」の民謡も収録されている。熊野の観光プロモーションを狙いとした完成度の高い作品で、これも熊野を題材にした音声付きの映画としては現存最古である。

大淀町では、これらのフィルムをデジタル化し、二〇一八（平成三十）年の四月からインターネットサイト〈ユーチューブ〉で公開している（「大淀町公式動画チャンネル」でも検索できる）。

開発が進む前の、吉野・熊野の原風景が映像で公開されたことへの反響は大きく、歴史に埋もれた岸田日出男という名前が、再び世を騒がせることになった。

今後も奈良県内各地で、日出男のように埋もれた巨人に光を当てる仕事が増えてくるのではないか。

■岸田日出男からの贈り物

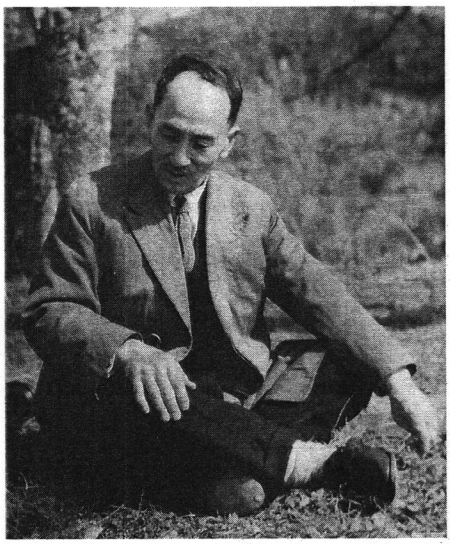
日出男の遺した資料は、「近現代の歴史資料」に分類される。しかし、国宝級の文化遺産や、記紀万葉の古代史ロマンに恵まれている奈良県にあって、「近現代の歴史資料」の価値はどうしても軽視されがちである。

奈良県という地域がたどってきた、多様な歴史・文化を考えるうえで、国宝であるかどうか、記紀万葉にゆかりがあるかどうかは、さほど重要ではない。日出男は、戦前の吉野・熊野地域の姿を、記録という形で克明に遺した。その私たちへの贈り物が、人と自然のかかわりを考えるうえで、かけがえのない「記憶遺産（アーカイブ）」である。

ことは言うまでもない。こういった「記憶遺産（アーカイブ）」を、しっかりと次代に伝えていくための組織や施設の整備を、奈良県全体で考えるべき時が来ているのではないか。

（まつだ・わたる＝大淀町教育委員会学芸員）

＝次回は8月3日付掲載予定＝



岸田日出男（昭和20年代後半、60歳前後頃か、岸田家提供）

【ご案内】

ミニ企画展「吉野学への誘い―岸田日出男の遺したもの―」

7月2日から8月6日まで、大淀町文化会館で開催。期間中、トーク＆交流会「今、岸田日出男を語る」＝7月22日（日）、28日（土）、午後1時30分から2時30分まで、大淀町文化会館ひだまりホール。松田度ほか。（参加無料・予約不要）